

命って…

この実践は、「アリを踏むような関わりをしていた子どもたちが、様々な生き物と出会い、興味を深める中で愛着が生まれ、小さな異変に気づいたり、命の大切さを感じたりしながら、生き物の立場に立つ姿へと変容した事例」です。生き物との関わりで生まれる素朴な疑問や、愛着を感じている対象だからこそ生まれる疑問に仲間と向き合い、解決していく子どもの姿に、「科学する心」の育ちを読み取ることができます。子どもの思いに寄り添う保育者の関わりが、子どもの学びを支えています。

富田林市立新堂幼稚園

5歳児

事例1. カエルとの出会い

<5月下旬>

保育者の関わり

<4月 進級当初の実態と保育者の願い>

アリを潰したり、ダンゴムシの体を曲げたりする子どもたちの姿があった。保育者は、子どもたちが生き物や自然、仲間と触れ合い、自らの思いで「命」を感じて欲しいと強く願い、心を揺さぶられるような毎日を共に創っていきたくて考えていた。

鳴き声が聞こえる

・保育室にいと、「ゲゲゲゴゴゲロゲロー」と、凄く大きなカエルの鳴き声が聞こえた。皆で近づくと、ピタリと声が止む。

Bさんが、「**分かった！カエルが起きたんや。この前、土におった！**」

・子どもたちが保育室にいて、声がする度にそーっと近づくとテラスに出るとすぐに声がピタリと止む。声がするたびに何度も挑戦するが、同じだった。

子ども：「**この声、絶対カエルや！けんかしてるんちゃう？」「なんでも聞こえるし、見えてるし、カエルってすごいな」「僕もカエルと思う。ゲゲ言うてるし。池かな？見てこよう」**

・Aさんが、カエルの卵を見つけて、「これ何？」と、ルーペでのぞいて言う。

子ども：「卵？カエルの？」「この前見た本に、同じの(卵)載ってるよ」「あれ？これは？小さいオタマジャクシ？」「この前見た本に、同じの(オタマジャクシ)載ってるよ」「載ってる！カエルの卵や！」「**目玉みたい！」「周りがゼリーみたい**」

動いてる…

Bさん：「**細長くなってる！」「動いてる！**」 Cさんは、黙って指を入れている。

Dさん：「先生一触ってるーいいの？」 担任：「優しく触ってあげなー死んじゃうよ」

Cさんは、指で捕まえようとして、指で水をクルクル回し、水流を作っている。

Bさん：「魚みたいや」

もっとよく見たい！

子ども：「うわーユラユラ揺れてるーお化けみたい」「これ生きてる？」

・オタマジャクシが泳ぎ出す。

子ども：「生きてるな！ゾンビの顔や！」「カエルはゾンビの子なんやー」

・数日後、魚のような形からオタマジャクシらしくなる。

Fさん：「見せて、見せてー」 Gさん：「押すな！」

・数人で押し合いになる。オタマジャクシになる前の生き物の入ったプレートを一ひっくり返す。みんなは、「ああああ！」と言って落ちた場所に注目する。

・Cさんは、「もう怒った！」と言い、残った卵を池に返す。残りの子どもは、床の生き物をみんな集めている。そして慌てて池に入れる。

カエルに元気になってほしい～話合いで…～

Cさん：「**池の方が元気に大きくなるから、いいんや。だって触るし、こぼすし**」

Gさん：「おまえも触ってたやん」 Cさん：「うるさい！」 周りの子ども：「…」

担任：「他の人はどうなん？」 Hさん：「**カエルに元気になって欲しい…**」

Bさん：「僕も同じです」

担任：「ほんまやね。ただ言い合いになっちゃうな。池に返すのも、じっくり見るのも、床に落ちたのを助けてあげるのも、カエルになって欲しいからやんね。優しいなー、オタマジャクもよくけんかするクラスやなーって笑ってるわ」

逃がしてあげて良かった

・池をのぞけば、オタマジャクシが泳いでいる。ウジャウジャ泳いでいる。

Iさん：「絵本みたいになるかな？楽しみ！」

子ども：「**こいつ、足がはえてるー」「こいつは、オタマジャクシのようなカエルのような顔や」「よーし、探検に行って、こいつらを調べてくる」**

・子どもたちは、そう言って捕まえては、居心地のいい場所に移動し、図鑑でオタマジャクシを調べている。そして、「家に帰りや」と返す。

・後日、畑がカエルでいっぱいになる。ふと目をやれば、カエルがあちらこちらで自然に溶け込んでいる。Eさん：「カエル幼稚園になったー」

Hさん：「**逃がしてあげて、ほんまに良かったな。いっぱい、カエルいてるわ**」



保育者は子どもたちが活動を進めていく様子を見守る。仲間の一員のように笑い、考え、子どもの発想を共感的に聞いていく。結果としてその積み重ねが豊かな生活を創っていくと考えた。



事例2. 烏骨鶏が…元気ない…

< 11月 >

卵を産まなくなったね

・飼育している烏骨鶏が最近、卵を産まなくなったことを、子どもたちが話題にしていた数日後、二羽のうちの一羽が死んでしまった。

子ども：「かわいそう…。なんで、死んだん？」

担任：「なんでかな？もう長いこと生きてたからかな？」

子ども：「長いこと生きてたら、死ぬの??」

園長：「命あるものは、必ず死ぬんや。それは決まってることやねんで」

子どもたち：「…」

園長：「皆に、毎日世話をしてもらって、喜んでいたと思うで」

子ども：「一匹になっちゃったな…」 「一人じゃ寂しいやろな…ずっと一緒にやったもんな…」

寝床にしているカゴから動かない～次の日～

・「どうしたんやろ…。病気かな？寂しいのかな??」「仲間がいなくなって烏骨鶏さんもショックなんかな？」と、気遣い、邪魔にならないように静かに掃除を終わらせる。心配そうに烏骨鶏をのぞき込み、声もかけずじっと様子を見ている。

ご飯、減ってない

・「あれ？今日もカゴから動いてない」「烏骨鶏さん、一個もウンコしてない」「昨日は二、三個ウンコしてたで」「ご飯、減ってない気がする」「あかんやん」

園長：「ずっと二匹仲良く暮らしたから、一匹になったら、残った一匹も死んでしまうこともよくあるらしい」

子ども：「ええ！！それはあかん。どうしよう！！」「ご飯ちゃんと食べて」「元気出して」すると、ムクリと起きて動き出す。「動いたー」

担任：「みんなの気持ちが届いたのちゃう？すごい」

・「水飲んでー」と言って、水入れを出すと、水を一口飲んだ。「飲んだー」「ご飯も食べてー」しかし、次の日も同じ。糞は一つも落ちてない。

子ども：「あかんわ。ウンコない」 Gさん：「寂しいんやな。おまえ寂しいんか？」

元気になってほしい

・自然と全員が集まり、何かできることはないのか、どうしたら寂しくなくなるのかを相談している。

子ども：「そうや！！絵描いたげるわ！！」「ほら友達やでー、寂しくないように描いたから元気出せ！！」と、絵を描いて烏骨鶏に見せている。周囲の友達も「僕も描く！！」「私も！！」「そっくりに描くわ」

・普段、関わっているものの、烏骨鶏を絵に表すと新たな発見がある様子で、「あれ？こんな所ブルーやった??」「足の模様きれい！」と、絵を描きながらも声をかけ、友達同士、「元気になってほしい」などと、話している。

・子どもたちの提案で、飼育小屋の周りに、描いた烏骨鶏の絵を貼ることになった。

それから烏骨鶏は、エサを食べ、糞も少ないながらもするようになった。

子どもたちが、「良かった！ウンコしてる。元気になってきてる」と、喜んだ。

ちょっと元気になったのに

子ども：「…」「なんで…」「ちょっと元気になったのに」

・子どもたちの様子を見つつ、園長が、「仲良しの烏骨鶏同士、また一緒におれるんちゃうか？」と伝える。子どもたちは、時間は必要であったが、少しずつ死を受け入れている。



子どもたちの感情を受け止めつつ、保育者も感情を表していく。



子どもたちの優しさ、いたわりの気持ち、烏骨鶏への愛着等、全てを共感して受け止めていく。生き物を大切にすることがもてるようになった自分たちの成長を、子ども自身も感じ取れるように伝えていく。

【考察】 4月頃のアリを踏み潰していた姿から、生き物のことを想い、行動するように変容している。生き物への興味を深める過程で、よく観たり、疑問を解決したり、相手の立場に立ったりしながら、子どもたちは、命の大切さを感じるようになった。また、生きるということは、食事をし、排泄をすることであり、元気になること(生命力)を烏骨鶏の姿から感じ取り確かめている。さらに、体調の変化を見逃さずに気づき、烏骨鶏に思いを集中し、友達とその思いを共有している。烏骨鶏の死は悲しい出来事であったが、子どもたちの気持ちと行動の成長が何より嬉しい。まずは、子どもの心が安定し、周囲の変化に気づく心のゆとりがあることや、その対象物と生活をともにしたと言えるほどの時間を共有し、愛着をもつことが大切であると感じた。生き物に愛着が湧くと、仲間の一員として大切に受け入れることが分かった。このような小さな小さな積み重ねの成長を大切に、以後の活動の基盤としたい。